

さまざまな経験やそのときどきの想いを糧に築きあげ、「昨日より今日、今日より明日」の人生を充実させている、対馬太郎さんの生き方を紹介します。

若者が「ここで生きたい」と思える地元



【Profile】青森県つがる市出身。弘前大学農学生命科学部卒業後、岩手大学で農学博士号取得。中国、インド、チェコなどで研究員として働く。令和元年青森県にUターンし、中高生向けの「学習塾」津軽塾を主宰。つがる市で野菜の水耕栽培にも挑戦している。

海外で気付かされた、「津軽」のすごさ

小学生の頃からバスケットボールに夢中で、その影響からアメリカのライフスタイルに憧れがあったという対馬さん。高校の生物の先生から影響を受け農業に興味を持ち、海外での生活を実現するひとつの手段として研究者を目指しました。弘前大学農学生命科学部を卒業後、大学院にも進学して農学博士号を取得します。「研究員として、初めてチェコで開催された国際学会に参加しました。世界各国から集まる研究者の仲間たちに、地元である津軽についてどんな場所かと聞かれたとき、初めて自分のアイデンティティについて深掘りしたんです。それまでは地元には何も無いと思っていました。それが、紹介している間にどんどん津軽の魅力を認識し始めて。地元の動画や写真を見せて、他者から「すごい場所だ！」と評価してもらったことで、地元にはこんなに魅力がいっぱいあったんだと知ったんです。」と笑顔で話す対馬さん。それまで何もないと評価していた地元に対し、

海外と比べても負けていないと気づいたことで、価値観の幅も広がったそうです。

地元の魅力と学びがつながる 学習塾「津軽塾」

20代後半は研究員として仕事に明け暮れていたのですが、これまで身に付けて来たことで何かしたいと、3年間勤めた国立研究開発法人の研究員を退職して青森県にUターン。「津軽を盛り上げたいという気持ちで、とにかく自分にか還元できることはないかと考えました。青森県の人口減少は深刻です。近い将来に、これまでと同じような経済活動が維持できなくなってしまう。人口を減らさないためにも高齢者には元気で長生きしてもらいたい。そのためには栄養価の高い緑黄色野菜が必要だと思い、水耕栽培での野菜作りを始めました。それから、若者が地元で生きることを楽しめるような、面白い仕事をつくる人材を育てるには教育だと思い、学習塾を始めました。」

弘前市土手町にある学習塾「津軽塾」では、対馬さんが中高生向けに5教科を教えています。特に理数系は大学入試にも対応していて、周辺の学習塾からの紹介や、青森市からわざわざ通う生徒もいるそうです。「学校や普通の塾とは少し違って、知識をただ教えるというより、知識の使い方、活用方法を教えたいと思っています。今の中高生は自分の話を受け止めてもらう機会が少なく、中高生同士、地域の方、親とのコミュニケーションの機会が減っているんです。この場所に通うことで、生徒が地元の歴史や文化と学習した知識を紐づけて捉えることができるようになります。ちよつとでも地元に興味を持つて知ろうとしてくれる生徒がいたら嬉しいですね。津軽にいるさまざまな人の価値観を学んで欲しいと思っています。」

「津軽塾」の一角には、つがる市にある水耕栽培の装置の一部を置いています。つがる市の圃場ではトマトとサンチュの水耕栽培を行っていて、およそ800株もの大規模栽培なのだそう。味がいいと評判で、収穫したサンチュは近隣の直売所に卸しています。水耕栽培は青森県ではまだまだ挑戦者が少ない未開拓分野。今後は事業化を目指していくそうです。

若者が地元で生きること 楽しめる津軽にしたい

ほかに、ダンボールを使ったまちおこしと芸術のイベント「ダンボリアン」、海外に向けて津軽を紹介するYouTubeチャンネルの更新など、津軽のエンターテイメントを支えている対馬さん。「田舎にも、もっとエンタメがあっていいと思うんです。人から人へ伝わってきた津軽の文化がたくさんある。それを自分たちのアイデンティティとして大切にしていきたいです。新しい津軽「NEO津軽」を作りたいです。古いも若きもシェアしやすい時代だからこそ、地元に住みながらも津軽を楽しめるといいです。「生活する環境や、どういう人たちと、何を一緒に過ごしていきたいか、という自分にとってベストな状態を探ることってすごく大事です。そのときに、津軽で暮らすこと、津軽の人たちと何かしたいと思える人が増えてほしい。津軽人であることを誇りに思っていて暮らせる人が増えてほしいですね。」

生徒たちに、成長することの楽しさを知ってほしいと話す対馬さん。昨日の自分より今日の自分が成長し、喜びや幸せを感じられるように、対馬さんは今日も生徒たちと向き合っています。

(取材：鈴木 麻里奈)

